

栄養学を学ぶ女子大学生の体型認識

佐藤 誓子¹, 永岡 優奈¹, 山下 美希², 佐藤 勝昌²

Recognition of Body Shape among Female University Students Studying Nutritional Science

Chikako Sato¹, Yuna Nagaoka¹, Miki Yamashita², Katsumasa Sato²

要 約

目的: 栄養学の知識の程度が異なる女子大学の栄養学系学科の1年生と4年生との間の体型認識の違いを検討することを目的とした。

方法: 女子大学の栄養学系学科に在籍している1年生と4年生を対象者として質問紙調査を行った。481枚の質問紙を配布し、449枚の有効回答を得た。調査項目は食生活等の状況や体型（現在の体型、今後の希望体型）、食行動、身体満足度から成っている。食行動はEAT-26及びEDIの下位尺度であるBulimiaを用いて評価した。身体満足度の評価にはBSQを用いた。

結果: 食行動を表すEAT-26素点合計得点, EAT-26置換合計得点, 及びEDI Bulimia置換合計得点は, 1年生群と4年生群との間に差を認めなかった。身体満足度を表すBSQ素点合計得点も両群間に差があるとはいえなかった。現在の体型をBMIによる体型分類よりも太っていると誤認識している者の割合及びBMIによる体型分類よりも痩せたい者の割合は, 両群間に違いはなかった。

結論: 女子大学生の現在の体型認識と今後の希望体型は, 栄養学の知識の程度によって異なるのではなく, 若年女性に共通している蓋然性が高い。

キーワード: 体型認識, EAT-26, EDI, Bulimia, BSQ

I. 緒 言

健康日本21（第2次）¹⁾では、20歳代女性のBMI (body mass index) が18.5未満の「やせ」

の者の割合を20%以下に減少させることを目標にしている。20歳代の女性の20%以上が「やせ」であるという状況は長く続いていたが²⁾、2014（平成26）年の調査³⁾では初めてこれを下回って17.4%になっている。但し、この状況は一過性である可能性があり、この割合の20%以下という状況が継続していくかについては、今後数年間の追

1 神戸女子大学健康福祉学部
Faculty of Health and Welfare, Kobe Women's University

2 神戸女子大学家政学部
Faculty of Home Economics, Kobe Women's University

跡が必要である。

我が国において、このような「やせ」の者が多い理由としては、若年女性の強い痩せ願望に起因していることは疑いの余地がない。その背景には、メディアによる「女性は痩せている方が美しい」という価値観の形成⁴⁾の関与が指摘されている。

我々⁵⁾は、若い女性の痩せ願望は学んできた教育内容や希望する進路の違いによって異なっている可能性があるとの仮説の下、4年生の女子大学生において栄養学を学ぶ者と教育学を学ぶ者との体型認識の違いについて検討したところ、若年女性の痩せ願望は学んできた教育内容などによって異なるのではなく、20歳代の女性に共通している可能性があることを報告している。しかし、教育学を学んできた4年生は、将来的には教師・保育士の資格取得を目指していることから、食育に関する大学教育は栄養学を学ぶ学生と同様に受けてきている。従って、このことが原因して教育学を学ぶ学生と栄養学を学ぶ学生との間に違いが生じなかった可能性がある。

そこで今回は、栄養学の知識の程度が異なる女子大学の栄養学系学科の1年生と4年生との間の体型認識には、違いがあるか否かを検討することを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象及び調査方法

兵庫県下にある女子大学の栄養学系学科に在籍する1年生及び4年生を対象者とした。2013年6月及び2014年6～7月に質問紙と調査に関する説明文書を配布し、同意が得られた対象者より質問紙を回収した。1年生には計251枚配布し、全員より回収した。4年生には計230枚配布し、これも全員より回収した。回収した質問紙のうち、年齢、身長、体重、現在の体型、及び今後の希望体

型についての項目に記載漏れのなかった対象者を有効回答（1年生群223名, 88.8%; 4年生群226名, 98.3%）として解析した。なお、本研究は、我々が既に報告⁵⁾している2013年7月に実施した調査と同じ質問紙を使用しているが、調査対象者の重複はない。

2. 調査内容

調査内容は既に報告⁵⁾している通りであり、以下には要点を記述する。調査項目は身体状況（年齢、身長、体重）、生活状況（生活環境、睡眠時間）、食生活状況（朝食欠食、間食摂食）、ダイエット状況（ダイエット経験、ダイエット開始時期）、体型（現在の体型、今後の希望体型）、食行動、身体満足度からなる。

生活環境については「同居」「一人暮らし」の別を尋ねた。睡眠時間は0.5時間単位の記入を求めた。朝食欠食、間食摂食、及びダイエット経験は表1に示したカテゴリで回答を求めた。ダイエット開始時期は「小学生未満」「小学生」「中学生」「高校生」「大学生」の5段階⁶⁾で質問したが、「小学生未満」への回答は無かった。現在の体型については「痩せている」「ふつう」「太っている」の3段階で尋ねた。今後の希望体型については、「太りたい」「現状でよい」「痩せたい」「部分的に痩せたい」の4段階で回答を求め、後2者を1つに統合して「痩せたい」として3分類で結果を示した。

食行動については、日本語版 EAT-26 (Eating Attitude Test-26)⁷⁻⁹⁾の尺度を用いた。これは26項目の質問に対して「1. 全くない」「2. たまに」「3. ときどき」「4. しばしば」「5. 非常にひんぱんに」「6. いつも」の6件法で回答を求め、素点合計得点及び置換合計得点で評価するものである。置換得点¹⁰⁾は「1. 全くない」「2. たまに」

「3. ときどき」を0点、「4. しばしば」を1点、「5. 非常にひんばんに」を2点、「6. いつも」を3点としている。いずれも得点が高いほど、食行動の異常傾向が高いことを示している。この置換合計得点は Buddeberg-Fischer ら¹¹⁾に従って、正常群(0~9点)、中度障害群(10~19点)、重度障害群(20点以上)に分類して食行動の異常傾向を評価した。また、日本語版 EDI (Eating Disorder Inventory)¹²⁾ の下位尺度の Bulimia に関する項目を調査に加えた¹³⁾。Bulimia は7項目からなり、回答は EAT-26 と同じ6件法で求め、その後 EAT-26 における場合と同様に置換得点¹⁴⁾を求めて置換合計得点で評価した。この場合も得点が高いほど、食行動の異常傾向が高いことを示している。

身体満足度については、日本語版 BSQ (Body Shape Questionnaire)¹⁵⁾ を用いた。BSQ は34項目からなる。回答は EAT-26 と同じ6件法で求めて素点合計得点で評価した。得点が高いほど、自身の身体に不満が強いと判断される。

3. 統計解析

平均値の差の検定には、対応のないt検定(Welchの検定)を用いた。分割表の検定には Fisher の正確確率検定を用いた。分割表のどのセルの観測度数が期待度数よりも有意に多いかは、調整済み標準化残差を算定する残差分析によった。解析には IBM SPSS Statistics 22 (日本 IBM 株式会社, 東京)を用い、欠損値は解析より除外した。統計学的検定の有意水準は0.05(両側検定)とした。

4. 倫理的配慮

本研究は、神戸女子大学ヒト研究倫理委員会の承認(受付番号:H25-11)を得た上で行った。

調査対象者には、研究の目的及び意義、研究の方法及び期間のほか、研究への協力は自由意思であり拒否できることなどを文書で提示した。

III. 結果

表1には、対象者の概要を示す。1年生群と4年生群との間において、年齢以外は身長、体重、BMI、及びBMIによる体型分類のいずれにおいても統計学的に有意な違いがあるとはいえなかった。生活環境においても有意な違いはなかった。睡眠時間は1年生群と4年生群との間に有意差を認め、1年生群の方が短かった。朝食欠食では、欠食頻度と学年との間には統計学的に有意な関連を認め、1年生群では「ほとんど欠食しない」者が多く、4年生群では「週2-3日欠食する」者及び「ほとんど欠食する」者が多かった。間食摂食では、間食の摂食頻度と学年との間に有意な関連はなかった。ダイエット経験の回数と学年との間にも有意な関連は認めなかった。ダイエット開始時期と学年との間には有意な関連があり、1年生群は中学生から開始した者が多く、4年生群では大学生になってから開始した者が多かった。現在の体型と今後の希望体型については、それぞれと学年との間に有意な関連を認めなかった。

表2には、食行動(EAT-26, EDI Bulimia)と身体満足度(BSQ)の合計得点を示す。いずれの項目においても1年生群と4年生群との間に統計学的に有意差があるとはいえなかった。また、EAT-26の置換合計得点を Buddeberg-Fischer ら¹¹⁾の分類に従って評価したところ、両群とも正常群に分類すべき値であった。

表3には、現在の体型認識とBMIによる体型分類との関連及び肥満誤認識率を示す。まず、現在の体型認識とBMIによる体型分類との関連(表3A)について述べる。得られた分割表より、体

表 1. 対象者の概要

項目	カテゴリ	平均値±標準偏差あるいは度数 (%)			P 値*
		全体	1年生群	4年生群	
A. 身体状況					
年齢 (歳) †	—	19.8±1.5	18.4±0.5	21.3±0.5	<0.001
身長 (cm) †	—	158.3±0.1	158.2±0.1	158.4±0.1	0.666
体重 (kg) †	—	51.0±5.9	50.8±6.0	51.2±5.8	0.423
BMI (kg/m ²) †	—	20.3±1.9	20.3±1.9	20.4±2.0	0.487
BMI による体型分類	やせ (18.5未満)	76 (16.9)	39 (17.5)	37 (16.4)	0.901
	普通 (18.5以上25未満)	364 (81.1)	180 (80.7)	184 (81.4)	
	肥満 (25以上)	9 (2.0)	4 (1.8)	5 (2.2)	
B. 生活状況					
生活環境	同居	293 (65.4)	152 (68.5)	141 (62.4)	0.197
	一人暮らし	155 (34.6)	70 (31.5)	85 (37.6)	
睡眠時間 (時間) ‡	—	6.0±1.0	5.8±0.9	6.1±1.1	0.001
C. 食生活状況					
朝食欠食	ほとんど欠食しない	335 (74.6)	201 [§] (90.1)	134 (59.3)	<0.001
	週2-3日欠食する	77 (17.1)	16 (7.2)	61 [§] (27.0)	
	週4-5日欠食する	9 (2.0)	2 (0.9)	7 (3.1)	
	ほとんど欠食する	28 (6.2)	4 (1.8)	24 [§] (10.6)	
間食摂食	ほとんど毎日食べる	139 (31.2)	69 (31.4)	70 (31.0)	0.839
	週4-5日食べる	195 (43.7)	92 (41.8)	103 (45.6)	
	週2-3日食べる	70 (15.7)	37 (16.8)	33 (14.6)	
	ほとんど食べない	42 (9.4)	22 (10.0)	20 (8.8)	
D. ダイエット状況					
ダイエット経験	なし	180 (40.2)	99 (44.6)	81 (35.8)	0.416
	あり1回	75 (16.7)	33 (14.9)	42 (18.6)	
	あり2-5回	158 (35.3)	74 (33.3)	84 (37.2)	
	あり6-9回	14 (3.1)	7 (3.2)	7 (3.1)	
	あり10回以上	21 (4.7)	9 (4.1)	12 (5.3)	
ダイエット開始時期	小学生	11 (4.1)	7 (5.7)	4 (2.7)	<0.001
	中学生	106 (39.4)	58 [§] (47.2)	48 (32.9)	
	高校生	120 (44.6)	54 (43.9)	66 (45.2)	
	大学生	32 (11.9)	4 (3.3)	28 [§] (19.2)	
E. 体型					
現在の体型	痩せている	17 (3.8)	8 (3.6)	9 (4.0)	0.985
	ふつう	239 (53.2)	118 (52.9)	121 (53.5)	
	太っている	193 (43.0)	97 (43.5)	96 (42.5)	
今後の希望体型	太りたい	6 (1.3)	3 (1.3)	3 (1.3)	1.000
	現状でよい	63 (14.0)	31 (13.9)	32 (14.2)	
	痩せたい	380 (84.6)	189 (84.8)	191 (84.5)	

* t 検定 (Welch の検定) あるいは Fisher の正確確率検定

† サンプルサイズ: 1年生群, 223; 4年生群, 226

‡ サンプルサイズ: 1年生群, 223; 4年生群, 224

§ 残差分析 (調整済み標準化残差が $P < 0.05$ で有意に多い)

表 2. 食行動 (EAT-26, EDI Bulimia) と身体満足度 (BSQ) の合計得点

項目	1 年生群		4 年生群		P 値*
	n	平均値±標準偏差	n	平均値±標準偏差	
EAT-26素点合計得点 [†]	216	51.0±13.7	221	50.1±12.8	0.503
EAT-26置換合計得点 [‡]	216	6.3±6.2	221	5.7±5.4	0.305
EDI Bulimia 置換合計得点 [§]	223	2.9±3.6	226	2.5±2.9	0.203
BSQ 素点合計得点	212	93.0±34.5	214	88.5±33.5	0.175

* t 検定 (Welch の検定)

[†] 最小値26点, 最大値156点

[‡] 最小値 0 点, 最大値78点

[§] 最小値 0 点, 最大値21点

^{||} 最小値34点, 最大値204点

表 3. 現在の体型認識と BMI による体型分類との関連及び肥満誤認識率

A. 現在の体型認識と BMI による体型分類との関連

群	BMI による 体型分類*	現在の体型認識 (%)			体型を正しく 認識している者 (%)	BMI による体型 分類よりも体型 を痩せている方 へ誤認識してい る者 (%)	BMI による体型 分類よりも体型 を太っている方 へ誤認識してい る者 (%)
		痩せている	ふつう	太っている			
1 年生群	やせ	7 (17.9)	31 (79.5)	1 (2.6)	7 (17.9)	—	32 (82.1)
	普通	1 (0.6)	87 (48.3)	92 (51.1)	87 (48.3)	1 (0.6)	92 (51.1)
	肥満	0 (0)	0 (0)	4 (100)	4 (100)	0 (0)	—
	(計)	8 (3.6)	118 (52.9)	97 (43.5)	98 (43.9)	1 (0.4)	124 (55.6)
4 年生群	やせ	5 (13.5)	29 (78.4)	3 (8.1)	5 (13.5)	—	32 (86.5)
	普通	4 (2.2)	92 (50.0)	88 (47.8)	92 (50.0)	4 (2.2)	88 (47.8)
	肥満	0 (0)	0 (0)	5 (100)	5 (100)	0 (0)	—
	(計)	9 (4.0)	121 (53.5)	96 (42.5)	102 (45.1)	4 (1.8)	120 (53.1)
全体	やせ	12 (15.8)	60 (78.9)	4 (5.3)	12 (15.8)	—	64 (84.2)
	普通	5 (1.4)	179 (49.2)	180 (49.5)	179 (49.2)	5 (1.4)	180 (49.5)
	肥満	0 (0)	0 (0)	9 (100)	9 (100)	0 (0)	—
	(計)	17 (3.8)	239 (53.2)	193 (43.0)	200 (44.5)	5 (1.1)	244 (54.3)

B. 肥満誤認識率

群	BMI による体型分類よりも 体型を太っている方へ 誤認識している者	体型を正しく認識している者と BMI による体型分類よりも 体型を痩せている方へ 誤認識している者	肥満誤認識率 (%)	P 値 [†]
1 年生群	124	99	55.6	0.636
4 年生群	120	106	53.1	
全体	244	205	54.3	—

* BMI 値18.5未満を「やせ」、18.5以上25未満を「普通」、25以上を「肥満」。

[†] Fisher の正確確率検定

表4. 今後の希望体型とBMIによる体型分類との関連及び痩せ願望率

A. 今後の希望体型とBMIによる体型分類との関連

群	BMIによる 体型分類*	今後の希望体型 (%)			BMIによる 体型分類よりも 太りたい者 (%)	現在の体型を 希望する者 (%)	BMIによる 体型分類よりも 痩せたい者 (肥満を除く) (%)
		太りたい	現状でよい	痩せたい			
1年生群	やせ	3 (7.7)	17 (43.6)	19 (48.7)	3 (7.7)	17 (43.6)	19 (48.7)
	普通	0 (0)	14 (7.8)	166 (92.2)	0 (0)	14 (7.8)	166 (92.2)
	肥満	0 (0)	0 (0)	4 (100)	0 (0)	0 (0)	-
	(計)	3 (1.3)	31 (13.9)	189 (84.8)	3 (1.4)	31 (14.2)	185 (84.5)
4年生群	やせ	3 (8.1)	13 (35.1)	21 (56.8)	3 (8.1)	13 (35.1)	21 (56.8)
	普通	0 (0)	19 (10.3)	165 (89.7)	0 (0)	19 (10.3)	165 (89.7)
	肥満	0 (0)	0 (0)	5 (100)	0 (0)	0 (0)	-
	(計)	3 (1.3)	32 (14.2)	191 (84.5)	3 (1.4)	32 (14.5)	186 (84.2)
全体	やせ	6 (7.9)	30 (39.5)	40 (52.6)	6 (7.9)	30 (39.5)	40 (52.6)
	普通	0 (0)	33 (9.1)	331 (90.9)	0 (0)	33 (9.1)	331 (90.9)
	肥満	0 (0)	0 (0)	9 (100)	0 (0)	0 (0)	-
	(計)	6 (1.3)	63 (14.0)	380 (84.6)	6 (1.4)	63 (14.3)	371 (84.3)

B. 痩せ願望率

群	BMIによる体型分類よりも 痩せたい者 (肥満を除く)	BMIによる体型分類よりも 太りたい者と現在の体型を 希望する者	痩せ願望率 (%)	P 値†
1年生群	185	34	84.5	1.000
4年生群	186	35	84.2	
全体	371	69	84.3	-

, †表3の脚注, †を参照のこと。

型を正しく認識している者、BMIによる体型分類よりも体型を痩せている方へ誤認識している者、及びBMIによる体型分類よりも体型を太っている方へ誤認識している者についての再集計を行った。その結果、1年生群と4年生群のいずれにおいても、BMIによる体型分類よりも体型を痩せている方へ誤認識している者は少なかった。他方、BMIによる体型分類よりも体型を太っている方へ誤認識している者は多く、その割合は「やせ」の者の方が「普通」の者よりも多かった。次に、表3Aより再集計した肥満誤認識率(表3B)について述べる。BMIによる体型分類よりも体型を太っている方へ誤認識している者の割合(肥満

誤認識率)を1年生群と4年生群で比較した。その結果、両群の女子大学生とも肥満誤認識率は50%以上であったが、両群間に統計学的に有意な違いはなかった。

表4には、今後の希望体型とBMIによる体型分類との関連及び痩せ願望率を示す。この場合も、表3におけるように再集計したデータを用いて解析した。今後の希望体型とBMIによる体型分類との関連(表4A)では、1年生群と4年生群のいずれにおいても、BMIによる体型分類よりも太りたい者及び現在の体型を希望する者は少なく、BMIによる体型分類よりも痩せたい者の方が多かった。なお、BMIによる体型分類が「肥満」

の者は健康のために痩せる必要があることから、痩せたい者としては算定しなかった。次に、痩せ願望率（表4B）について述べる。1年生群と4年生群のいずれにおいても痩せ願望率は80%以上と高かった。しかし、両群の間に統計学的に有意な違いはなかった。

IV. 考察

栄養学の知識の程度が異なる女子大学の1年生と4年生との間の体型認識の違いについて検討した。その結果、両群は食行動及び身体満足度に特に問題のある集団でもなく、食行動及び身体満足度に有意な違いもなかった。現在の体型をBMIによる体型分類よりも太っていると誤認識している者の割合及びBMIによる体型分類よりも痩せたい者の割合は、両群間に違いはなかった。しかしながら、生活状況、食生活状況、及びダイエット状況において、1年生群と4年生群との間に統計学的に有意な違いを認めた項目があった。

食行動に関するEAT-26及びEDI Bulimiaの各尺度得点は、高いほど異常傾向が強いと判定される。今回のEAT-26の素点合計得点は、女子大学生を対象にした長尾ら⁶⁾の結果（平均値53.6～56.6）や我々⁵⁾の4年生の女子大学生における栄養学を学ぶ者と教育学を学ぶ者との結果（平均値47.4～49.9）と比較しても、統計学的検討は行っていないが、大差ないと考えている。そして、EAT-26置換合計得点の平均値は、Buddeberg-Fischerら¹¹⁾の分類に従えば、今回の1年生群及び4年生群はいずれも正常群（0～9点）に分類される値である。さらに、EDI Bulimia置換合計得点も、Garnerら¹⁴⁾及び北川¹²⁾が神経性無食欲症や神経性大食症患者に実施した際の健常対照群の値（それぞれ、平均値2.0及び2.7～5.9）と比較して特に異なる値ではないと考えている。従っ

て、今回検討した栄養学を学ぶ女子大学の1年生群及び4年生群においては、両群の食行動に違いはなく、また両群とも食行動に異常傾向があるとはいえないことを示唆している。

身体満足度についてのBSQ尺度得点も、高得点ほど身体に不満が強いと判定される。今回の1年生群と4年生群間に有意差はなく、両群の平均値は前者が93.0、後者が88.5であった。小林ら¹⁵⁾は摂食障害を主訴に精神科を受診した女性の患者群と、対照群として看護学校的女子学生を対象にBSQを用いて検討を行ったところ、対照群の素点合計得点の平均値は103.7であったと報告している。今回のBSQ素点合計得点の平均値は1年生群及び4年生群のいずれにおいても、統計学的検討は行っていないが、この対照群の値より低いと考えている。従って、今回の1年生群及び4年生群においては、両群の身体満足度に違いはなく、また両群とも特に身体への不満が強くとはいえないことを示唆している。

女子大学で栄養学を学ぶ1年生群と4年生群の肥満誤認識率及び痩せ願望率は、いずれも有意な違いがあるとはいえず、肥満誤認識率は両群ともほぼ同じ約5割、痩せ願望率も両群ともほぼ同じ約8割であった。加えて、上述してきたように、両群とも食行動及び身体満足度に特に問題のある集団ではなかった。これらのことは、女子大学生の現在の体型認識と今後の希望体型は、栄養学の知識の程度の違いに依存するのではないことを示唆している。同様なことを我々⁵⁾は、女子大学の4年生の教育学を学ぶ者と栄養学を学ぶ者との比較においても報告している。従って、女子大学生の現在の体型認識と今後の希望体型は、学んでいる教育の程度や教育内容、将来の進路の違いによって異なっているのではなく、大学入学後の18・19歳を含めた20歳代女性に共通している可能

性があることを強く示唆している。

既に報告⁵⁾している女子大学の4年生における栄養学を学ぶ者と教育学を学ぶ者との比較では、身体状況、生活状況、食生活状況、ダイエット状況、及び体型のいずれにおいても両群間に統計学的に有意な違いを認めていない。しかしながら、今回の女子大学で栄養学を学ぶ1年生群と4年生群との間には身体状況（但し、年齢の有意差は例外とする）及び体型以外の項目に有意な違いがあった。ここではこれらの点について言及したい。まず、生活状況の睡眠時間について述べる。睡眠時間は1年生群と4年生群との間に有意差があり、1年生群の方が短かった。これは、1年生は1限からの授業が多いという調査対象校の特徴に起因していると考えている。次に、食生活状況の朝食欠食については、朝食の欠食頻度と学年との間には有意な関連があり、1年生群は「ほとんど欠食しない」者が多いのに対して、4年生群は「週2-3回欠食する」者と「ほとんど欠食する」者が多かった。この朝食欠食の違いを検討するため、既に報告⁵⁾している栄養学を学ぶ4年生と今回の4年生とをFisherの正確確率検定で比較検討してみたところ、統計学的に有意な違いは認めなかった($P=0.211$)。このことは、前回⁵⁾の栄養学を学ぶ4年生群に比して今回の4年生群の方が、朝食の欠食頻度が高い者が特に多いということではないことを示唆している。むしろ、1年生群に「ほとんど欠食しない」者が多いということが、今回の検定結果になったと理解すべきであろうと考えている。同様なことは内閣府¹⁶⁾も報告しており、男女を合わせた大学生の朝食の欠食頻度は上級学年ほど高くなっているという。3番目に、ダイエット状況のダイエット開始時期について述べる。ダイエットの開始時期と学年との間には有意な関連があり、1年生群は中学生の時

期に開始した者が多く、4年生群は大学生の時期に開始した者が多かった。これについても既に報告⁵⁾している栄養学を学ぶ4年生のデータと比較検討したところ、統計学的に有意な違いは認めなかった($P=0.652$)。この結果は、前回⁵⁾の栄養学を学ぶ4年生群と今回の4年生群のダイエットの開始時期は特に異なっている訳ではないことを示唆しており、むしろ今回の検定結果は、1年生群のダイエット開始時期が早くなったことに起因していると解釈すべきであり、この結果はダイエットの低年齢化を示唆しているかもしれないが、この点に関しては今後の検討を待ちたい。

長尾ら⁶⁾は、BMI分類で「やせ」や「普通」に分類される者の中に、さらに痩せたいと希望する者がいることは、彼女達のやせ志向と同時にボディイメージの歪みも存在していることが考えられると述べている。今回の4年生群は1年生群に比して3年も長く栄養学や関連領域の教育を受けていることから、4年生群は1年生群よりも栄養学の知識の程度は高いはずである。それに関わらず、痩せ願望やボディイメージの歪み（肥満であるという誤認識）は両群において変わらなかった。これは、既に報告⁵⁾しているように、今回も中学生時代までに約3~5割が、高校生時代までに約8~9割が、恐らくは痩せることを目的にダイエットを行っていたことが影響していたと考えている。そして、前回⁵⁾も述べたが、今後は大学入学前の中学校あるいは高等学校において、女子生徒に対するボディイメージの教育を行うことによって、自らの体型を正しく認識させる教育が必要であると考えられる。

本研究の限界は、調査対象者に対して摂食障害の有無についての直接的な質問を行っていない点にある。従って、病的な神経性無食欲症や神経性大食症の可能性のある者、あるいは医師にこれら

の疾患であると診断された者が、集団内に存在していた可能性がある。このような限界はあるものの、女子大学生の体型認識は、若年女性に共通している蓋然性が高いことを示唆した点に本研究の意義があると考えられる。

V. 結論

女子大学生の現在の体型認識と今後の希望体型は、栄養学の知識の程度によって異なるのではなく、若年女性に共通している蓋然性が高い。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

文献

- 1) 厚生労働省：健康日本21（第2次）(http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kenkounippon21.html) 最終アクセス日2016年9月22日
- 2) 厚生労働省：平成25年国民健康・栄養調査報告 平成27年3月 (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyuu/dl/h25-houkoku.pdf>) 最終アクセス日2016年9月22日
- 3) 厚生労働省：平成26年国民健康・栄養調査報告 平成28年3月 (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyuu/dl/h26-houkoku.pdf>) 最終アクセス日2016年9月22日
- 4) 水島広子：「やせ願望」の精神病理－摂食障害からのメッセージ, 12-30 (2001), PHP 研究所, 東京
- 5) 中山沙弥香, 赤坂千尋, 佐藤誓子, 三宅茂夫, 佐藤勝昌：女子大学生の体型認識に及ぼす大学教育の影響, 神戸女子大学家政学部紀要, 49, 24-32 (2016)
- 6) 長尾麻衣, 宮澤洋子, 土田満：大学生の食行動およびやせ志向に対する栄養教育の影響, 日本健康体力栄養学会誌, 16, 36-44 (2011)
- 7) 新里里春, 玉井一, 藤井真一, 吹野治, 中川哲也, 町元あつこ, 徳永鉄哉：邦訳版食行動調査表の開発およびその妥当性・信頼性の研究, 心身医学, 26, 397-407 (1986)
- 8) 永田利彦, 切池信夫, 吉野祥一, 西脇新一, 竹内伸江, 田中美苑, 川北幸男：Anorexia nervosa, bulimia 患者における Eating Attitudes Test の信頼性と妥当性, 臨床精神医学, 18, 1279-1286 (1989)
- 9) Mukai T, Crago M, Shisslak CM: Eating attitude and weight preoccupation among female high school students in Japan, J. Child Psychol. Psychiat., 35, 677-688 (1994)
- 10) Garner DM, Olmsted MP, Bohr Y, Garfinkel PE: The eating attitudes test: psychometric features and clinical correlates, Psychol. Med., 12, 871-878 (1982)
- 11) Buddeberg-Fischer B, Bernert R, Schmid J, Buddeberg C: Relationship between disturbed eating behavior and other psychosomatic symptoms in adolescents, Psychother. Psychosom., 65, 319-326 (1996)
- 12) 北川椒子：神経性食欲（思）不振症－日本人の特定グループにおける EDI の比較－, 共立女子大学家政学部紀要, 32, 55-64 (1986)
- 13) 向井隆代：摂食障害「心理測定尺度集 III」心の健康をはかる〈適応・臨床〉(堀洋道 監修, 松井豊 編), 248-258 (2008), サイエンス社, 東京
- 14) Garner DM, Olmstead MP, Polivy J: Development and validation of a multidimensional eating disorder inventory for anorexia and bulimia, Int. J. Eating

Disord., 2, 15-34 (1983)

- 15) 小林要二, 館哲朗, 室津恵三, 福地由美: 摂食障害患者に対する Body Shape Questionnaire (BSQ) の試み - BSQ 日本語版の信頼性および妥当性の研究 -, 臨床精神医学, 30, 1501-1508 (2001)
- 16) 内閣府: 大学生の食に関する実態・意識調査報告書 平成21年9月 (<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/more/research/pdf/syoku-report.pdf>) 最終アクセス日2016年9月22日